

平成 23 年度「わたしの主張」宮古地区大会 最優秀賞

「命てんでんこ」 2 年 加藤 諒太

僕は思う。あの日の体験をこれから生きていく人々に伝えたい。

三月十一日、二時四十六分、大きな地震が東日本を襲った。僕たちは体育館で卒業式の練習をしていた。先生の声で校庭に出た。校庭はまるでゼリ一のように波打ち、泣き出す人もいた。みんなで励まし合いながら恐怖に耐えていた。そして「逃げろ」という声が出て、何がなんだか分からないまま、僕たちは裏山に登った。津波はものすごい速さで町を飲み込み、さっきまでの町並みを一瞬でがれきに変えてしまった。声も何も出なかった。ただこわくて体が震えた。津波を目の前で見て、何もできない僕たちはおろおろするだけだった。

その日は、全校生徒が田老総合事務所で一夜を明かした。消防団の父さんに、夜十一時頃に会えてとても安心したが、寝るにも寝られない夜だった。夜が明け、外を見ると、がれきの上に雪が積もっていた。昔から津波の次の日には雪が降るといふ言い伝えがあるらしい。言い伝えのとおりすぎて驚いた。そして、がれきの上の雪は僕たちをますます悲しくさせた。明るくなるにつれて、家の人がやってきて、みんな家へと帰って行った。家の人が会いに来るたびに、涙を流す仲間の姿を見送った。

三日目、千徳の祖父母の家に行った。電気も水もガスも復旧していて、その違いに驚いた。でも僕はなんだか落ち着かず、じっとしていられなかった。父さんと一緒に消防団の仕事を手伝いたいと言った。生きている人がいるかもしれないと、一生懸命にがれきの中を父さんと歩いた。

僕はがれきの中を歩きながら思ったことが二つある。一つは「命てんでんこ」という言葉の深い意味。命より大切なものはありません。どんなことがあっても逃げることを考えてください。命があればどうにでもなります。未来に向かって歩き出せます。

もう一つは、負けたくないと思ったことです。田老は今まで何度も津波の被害にあい、それを乗り越えてきた町です。校歌の三番には田老一中生の進むべき道が示してあります。

防浪堤を仰ぎ見よ

試練の津波幾たびぞ

乗り越え立てし 我が郷土

父祖の偉業や 跡継がん

僕はあの日のことをたくさんの人に伝えたい。命を大切にしようと伝えたい。そして、決してあきらめず僕らの未来を作りたい。